

ボランティア活動に対するイメージや参加成果志向から 高校生クラブ「ぼんだま」の指導を考える

家庭科 山元 有子

1. はじめに

1.1 高校生クラブ「ぼんだま」

本校には、ボランティア活動を行う屋久島町高校生クラブ「ぼんだま」がある。このクラブは、平成19年10月の屋久島町発足に伴い、2つの高校生クラブ(旧上屋久町の「ぼんかん」と旧屋久町の「こだま」)が統合し設立されたものである(熊毛地域青少年育成推進協議会 2017)。現在、56名(内訳は3年生21名、2年生17名、1年生18名)の生徒が「ぼんだま」に所属している。2017年4月から2018年1月までの期間に行われた地域行事へのボランティア活動や研修会等に延べ280人の生徒が参加した(表1)。生徒が携わった活動の種類は多岐にわたり、地域で開催される各行事の準備や後片付け、司会、レクリエーション、介護、募金などの活動を行った(図1～図4)。このような地域に密着した様々な種類のボランティア活動を行うことは、生徒にとってボランティア活動の楽しさや達成感、気づきを得る学びの機会になっている(表2)。

1.2 目的

今年度、表1にある様々なボランティア活動の案内と参加の呼びかけ、事前指導、各団体への連絡等の業務を担当の先生方とともに進めてきた。しかしながら、計画された活動への対応に追われ、「ぼんだま」所属生徒のボランティア活動に対する意識を踏まえた指導はできていない。そこで、今後のボランティア活動の指導のあり方を検討するために、本研究では質問紙調査を行い、(1)本校生徒1、2年生は、ボランティア活動に対してどのようなイメージを抱いているのか、(2)「ぼんだま」所属生徒のボランティア活動への参加成果志向にはどのような特徴があるのかを明らかにすることを目的とした。

表1 2017年度「ぼんだま」のボランティア活動と参加延べ人数(4月～1月)

月 日	ボランティア・研修会等	場 所	参加延べ人数(人)
5月21日	県ジュニア・リーダー研修会	かごしま県民交流センター	2
5月27日	平成29年度屋久島町子ども会リーダー研修会内レクリエーション	宮之浦体育館	18
5月28日	平成29年度中央ブロック子ども会ジュニア・リーダー及び高校生クラブ等交流大会「熊毛地区大会」第2回実行委員会	種子島	2
7月1日	第5回世界遺産「屋久島」オープンウォータースイミング2017	一湊海水浴場	11
7月2日	第58回県体熊毛地区大会競技運営に係る補助	健康の森公園陸上競技場	6
7月16日	平成29年度中央ブロック子ども会ジュニア・リーダー及び高校生クラブ等交流大会「熊毛地区大会」第3回実行委員会	種子島	2
7月16日・17日	屋久島高校吹奏楽部定期演奏会	屋久島離島開発総合センター	9
7月22日・23日	平成29年度中央ブロック子ども会ジュニア・リーダー及び高校生クラブ等交流大会「熊毛地区大会」	種子島	5
7月23日	屋久島環境文化村センター開館記念イベント	屋久島環境文化村センター	4
7月24日・25日・26日 27日・28日, 8月21日	夏休み介護ボランティア	縄文の里	22
8月5日・6日	第36回屋久島ご神山祭り	火之神山埠頭	15
10月13日・14日・15日	やくしま森祭り	屋久島離島開発総合センター	72
11月4日	第5回やくしま夢祭り	安房川沿い 如竹通り	12
12月7日・9日・11日 13日・15日	赤い羽根共同募金	校内	37
12月16日	「チャレンジ!～親子で学び・感じ・体験しよう～」 鹿児島実業高校新体操部	宮之浦体育館	22
1月3日	平成30年屋久島町成人式	屋久島離島開発総合センター	8
1月21日	県ジュニア・リーダー研修会	かごしま県民交流センター	1
1月28日	「やくしまっ子」わんぱくフェスタ2018(ぼんだま自主開催)	宮之浦体育館	32
合 計			280



図1 子ども会リーダー研修会内レクリエーション
(子どもたちにレクリエーションの方法を教える)



図2 世界遺産「屋久島」オープンウォーター
スイミング(受付: 選手の両腕に番号を記入する)



図3 屋久島夢祭りの準備
(通りにキャンドルを並べ点灯する)



図4 やくしまっ子わんぱくフェスタ 2018
(ゲームの方法を子どもたちに説明する)

表2 ボランティア活動後の生徒の感想

<p>子ども会リーダー研修会内レクリエーション</p> <ul style="list-style-type: none"> ・準備はスムーズにできていたと思う。学校での練習はしっかりできていたが、家であまり練習することができなかったのもう少し練習すればよかった。本番では緊張して、自分から行動することができなかったのも、次からはもっと積極的に行動できるように自分にできることを探していきたい。 ・今回はレクリエーションの参加者の人数が少なく段取りがしっかりしていない部分があった。また、参加者が来ないとわからないことがあるため、参加者をうまくまとめられない点があった。アドリブや気を利かすことも大事だと思った。
<p>夏休み介護ボランティア</p> <ul style="list-style-type: none"> ・今日の体験を通して、たくさんのお話を聞くことができました。最初に説明を受けた時には上手く話せるか、しっかり仕事をこなせるか不安でした。しかし、高齢者の方々は、笑顔でお話してくれて、こちらもすごくリラックスして話をすることができました。数字や漢字を使ったゲームでは私たちよりも高齢者の方々がはやく答えて、とても驚きました。楽しく交流できて、とても楽しかったです。介護士の方々は、高齢者の方々に何度も話しかけていました。話すことはとても大事だと感じました。施設では段差があまりなく、高齢者の方々が歩きやすいように手すりがついていて、いろいろな場所に工夫がされていると思いました。「ゆっくり」「はっきり」「明るく大きな声」が聞き取りやすいことも知ったので、これから高齢の方々と話す機会があれば、そのことを心がけながらコミュニケーションをとっていきたいと思いました。とても良い経験をする事ができました。
<p>屋久島ご神山祭り</p> <ul style="list-style-type: none"> ・2日目の参加だけでしたが、しっかり役目を果たせていたと思う。途中雨がすごく降って大変でしたが、否定的な発言もなく最後まで楽しくできました。 ・途中雨が降りながらのボランティアで大変でしたが、みんなが祭りを楽しめるようにごみ拾いやごみ分別系の活動ができ、とても達成感を得られました。
<p>屋久島夢祭り</p> <ul style="list-style-type: none"> ・たくさんのお話を聞くにつれて作業は腕が疲れ、腰も痛くなり大変だった。しかし、夜にきれいな光景を見て、やったかいがあったと思った。私たちが並べた灯籠の明かりで、きれいな空間を作ることができてよかった。また、たくさんの人や自分自身が幸せになれる祭りは最高。 ・人数が少なく大変なところもあったけれど、楽しくできた。当日のようなものをつくるか事前に考えておいた方がよいと思った。
<p>やくしまっ子わんぱくフェスタ 2018</p> <ul style="list-style-type: none"> ・幼稚園、保育所訪問では、簡単な言葉を使って子どもたちにわかりやすく伝えることが難しかった。 ・リハーサルで細かい所までアドバイスをもらったので、本番に向けて改善や手直しができた。準備することの大切さを感じた。 ・前日のリハーサルの反省をいかして、当日は子どもたちに丁寧に大きな声で説明を行うことができた。 ・みんな笑顔で接していて、子どもたちも楽しそうにしていた。 ・練習の時よりも説明が上手にでき、困っている子どもたちを見つけたら助けてあげることができた。楽しそうにしている子どもたちを見て自分も楽しかった。 ・子どもの話をしっかり聞いてあげることで、子どもがどんどん話しかけてくれて凄く嬉しかった。 ・準備をもう少し早くから進めてよいものを作るようにしたい。時間に余裕を持って取り組むことで落ち着いて準備ができる。 ・準備は決まった人しか集まらず、時間は十分にかけていたはずなのにギリギリの完成になってしまった。

2. 研究方法

2.1 調査対象者

調査対象者は、本校生徒 161 人で内訳は 1 年生 76 人（男子 47 人，女子 29 人）， 2 年生 85 人（男子 40 人，女子 45 人）であった。

2.2 調査方法

2017 年 11 月 24 日から 12 月 7 日の期間に無記名形式の質問紙調査を行った。調査時間は約 5 分程度であった。質問紙は、荒井 (2016) の「ボランティア活動イメージ」尺度の 23 項目をもとに高校生用に 3 項目を追加した 26 項目を質問項目とした。回答形式は、「まったく思わない」から「とても思う」の 5 件法とし、それぞれ 1 点から 5 点の得点化をした。同時にフェイス項目として、性別、小・中学校におけるボランティア活動の有無、「ぼんだま」所属の有無を入れた。「ぼんだま」所属生徒については、荒井・野嶋 (2017) の「ボランティア活動の参加成果志向」尺度の質問項目から 32 項目を用い高校生用に表現を変えた質問紙調査も行った。ボランティア活動を通じて得たい参加成果の期待を調査した。回答形式は、「全く当てはまらない」から「とても当てはまる」の 5 件法とし、それぞれ 1 点から 5 点の得点化をした。

3. 研究結果

3.1 因子分析 「ボランティア活動イメージ」質問紙調査

「ボランティア活動イメージ」質問紙の調査回答数は、161 人であった。未回答のある 4 人を除いた 157 人を分析対象とした。内訳は 1 年生 74 人（男子 45 人，女子 29 人）， 2 年生 83 人（男子 38 人，女子 45 人）であった。「ボランティア活動イメージ」質問紙について G-P 分析と I-T 相関による項目分析を行った結果、不適切な 9 項目を除外した 17 項目が残った。これらの項目に対し、主因子法、バリマックス回転による因子分析を行った。固有値の順は、4.49, 2.03, 1.55, 1.43, 0.98, 0.84 となり、スクリープロットと因子の解釈の可能性から 4 因子が妥当であると判断した。さらに因子負荷量が .35 未満の項目であった質問項目を除外して因子分析を行った結果を表 3 に示した。

第 1 因子は、「ボランティア活動は、勉強になるものである」、「ボランティア活動は、楽しいものである」、「ボランティア活動は、自分のためになるものである」など自己実現を目指すイメージを含む項目が高い負荷量を示したので、「自己実現」($\alpha = .81$) 因子と命名した。第 2 因子は、「ボランティア活動は優しさというイメージがある」、「ボランティア活動は、親切心である」、「ボランティア活動は、災害援助というイメージがある」など親和的で他者支援のイメージを含む項目が高い負荷量を示したので、「親和支援」($\alpha = .68$) 因子と命名した。第 3 因子は、「ボランティア活動は、無責任である」、「ボランティア活動は、おせっかいである」など活動に対する否定的なイメージを含む項目が高い負荷量を示したので、「否定」($\alpha = .67$) 因子と命名した。第 4 因子は、「ボランティア活動は、老人介護というイメージがある」、「ボランティア活動には、障がい者介護というイメージがある」など福祉支援のイメージを含む項目が高い負荷量を示したので、「福祉支援」($\alpha = .83$) 因子と命名した。分散の説明率は累積で 44.46% であった。

表3 「ボランティア活動イメージ」尺度の因子分析結果（バリマックス回転）

		I	II	III	IV	共通性
I 自己実現 ($\alpha=.81$)						
NO5	ボランティア活動は、勉強になるものである	-0.752	-0.219	-0.047	.039	.617
NO6	ボランティア活動は、楽しいものである	-0.709	-0.056	-0.147	.116	.541
NO23	ボランティア活動は、自分のためになるものである	-0.683	-0.186	-0.108	.062	.516
NO14	ボランティア活動は、余暇の有効活用ができる	-0.540	-0.045	.089	-0.032	.303
NO19	ボランティア活動は、人生の生きがいになるものである	-0.523	-0.194	-0.219	.040	.361
NO21	ボランティア活動は、人と人のふれ合いである	-0.480	-0.296	-0.115	.063	.335
NO11	ボランティア活動は、知識や経験が身につくものである	-0.470	-0.210	-0.124	.004	.281
II 親和援助 ($\alpha=.68$)						
NO20	ボランティア活動は優しさというイメージがある	-0.254	-0.664	-0.105	-0.008	.517
NO8	ボランティア活動は、親切心である	-0.101	-0.581	-0.106	-0.019	.359
NO24	ボランティア活動は、災害援助というイメージがある	-0.107	-0.505	.149	.046	.291
NO15	ボランティア活動は、困った人を助けるものである	-0.136	-0.489	-0.218	-0.041	.307
NO22	ボランティア活動には環境改善というイメージがある	-0.163	-0.397	-0.156	.025	.209
III 否定 ($\alpha=.67$)						
NO26	ボランティア活動は、無責任である	.053	.151	.777	.023	.629
NO25	ボランティア活動は、おせっかいである	.132	.056	.718	.042	.538
NO16	ボランティア活動は、偽善的である	.297	.180	.374	.203	.302
IV 福祉支援 ($\alpha=.83$)						
NO12	ボランティア活動は、老人介護というイメージがある	-0.064	-0.062	.029	.886	.794
NO7	ボランティア活動には、障がい者介護というイメージがある	-0.097	.031	.092	.799	.658
負荷量の二乗和		2.804	1.751	1.505	1.498	
寄与率 (%)		16.496	10.298	8.854	8.810	

3.1.1 性別による下位尺度得点

因子分析により抽出された因子の各項目の合計を項目数で除したものを下位尺度得点とし、157人の「ボランティア活動イメージ」の下位尺度得点を算出した。性別による下位尺度得点の差の検討を行うために、男子群 ($n=83$) と女子群 ($n=74$) の下位尺度得点について t 検定を行った。その結果、「自己実現 ($t(155)=3.80, p<.01$)」、「親和支援 ($t(155)=3.22, p<.01$)」、「福祉支援 ($t(155)=2.95, p<.01$)」は1%水準で男子より女子が高かった。「否定 ($t(155)=2.00, p<.05$)」は5%水準で有意差がみられ女子より男子が高かった。

3.1.2 小・中学校時代のボランティア経験の有無による下位尺度得点

小・中学校時代のボランティア経験の有無による下位尺度得点の差の検討を行うために経験有り群 ($n=103$) と経験無し群 ($n=54$) の下位尺度得点について t 検定を行った。その結果、「自己実現 ($t(155)=0.22, n.s.$)」、「親和支援 ($t(155)=0.33, n.s.$)」、「否定 ($t(155)=0.24, n.s.$)」、「福祉支援 ($t(155)=0.65, n.s.$)」は有意差がみられず、小・中学校時代のボランティア経験の有無による違いはみられなかった。

3.1.3 「ぼんだま」所属の有無による下位尺度得点

「ぼんだま」所属の有無による下位尺度得点の差を検討するために所属群 ($n=36$) と非所属群 ($n=121$) の下位尺度得点について t 検定を行った。その結果、「自己実現 ($t(155)=4.29, p<.01$)」は1%水準で有意差がみられ、「ぼんだま」所属の生徒は非所属群の生徒より高かった。しかし、「親和支援 ($t(155)=0.80, n.s.$)」、「否定 ($t(155)=1.31, n.s.$)」、「福祉支援 ($t(155)=0.27, n.s.$)」は有意差がみられず「ぼんだま」所属の有無による違いはみられなかった。

3.2 「ボランティア活動の参加成果志向」質問紙調査

「ぼんだま」所属生徒に行った「ボランティア活動の成果志向」質問紙調査の回答数は、35人で内訳は1年生16人(男子8人, 女子8人), 2年生19人(男子6人, 女子13人)であった。「ボランティア活動の成果志向」質問紙についてG-P分析とI-T相関による項目分析を行った結果、不適切な3項目を除外した29項目が残った。これらの項目について、先行研究の荒井・野嶋(2017)を参考に5因子の下位尺度得点を算出した(図5)。第1因子は、「自己成長」($\alpha=.94$)で「自分の

可能性を伸ばしたい」、「社会の人の役に立ちたい」、「自分と違う考え方を理解できるようになりたい」などの項目を含む。第2因子は「精神的 high揚」($\alpha=.78$)で「充実感を得たい」、「やり遂げたという達成感を得たい」、「皆で何かをする楽しさ・喜びを味わいたい」などの項目を含む。第3因子は「キャリア開発」($\alpha=.59$)で「進学や就職に経験を活かしたい」、「やりたい仕事をみつけない」、「将来就きたい職業の現場を理解したい」などの項目を含む。第4因子は「ヘルス安寧」($\alpha=.87$)で「時間を有効に使いたい」、「ストレス解消・気分転換を図りたい」、「自分の居場所・活躍する場を見つけない」などの項目を含む。第5因子は「評価承認」($\alpha=.52$)で「人から感謝されたい」、「人から尊敬されたい」の項目を含む。

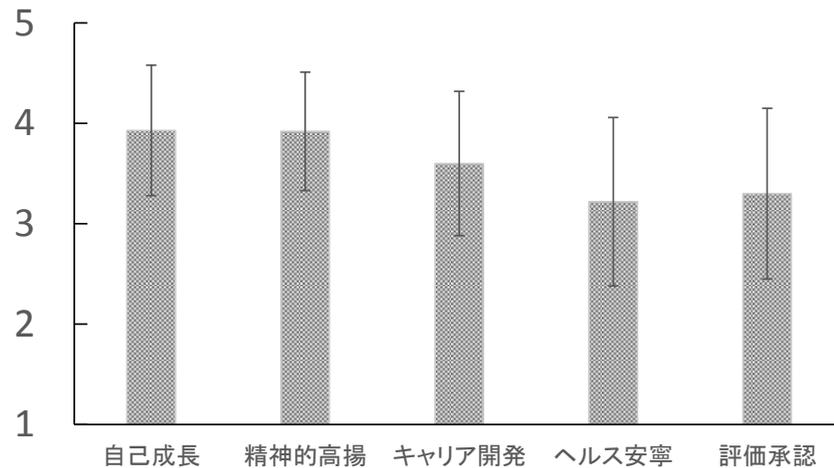


図5 ボランティア活動の成果志向の下位尺度得点の平均値と標準偏差

3.2.1 学年による下位尺度得点

「ぼんだま」所属生徒の学年による下位尺度得点の差を検査するために1年生 ($n=19$) と2年生 ($n=16$) の下位尺度得点について t 検定を行った。その結果、「精神的 high揚 ($t(33)=1.77, p<.10$)」は 10% 有意水準で有意傾向がみられ、1年生より2年生が高かった。しかし、「自己成長 ($t(33)=1.237, n.s.$)」、「キャリア開発 ($t(33)=0.85, n.s.$)」、「ヘルス安寧 ($t(33)=1.27, n.s.$)」、「評価承認 ($t(33)=1.11, n.s.$)」は有意差がみられず学年による違いはみられなかった。

3.2.2 「ボランティア活動イメージ」の高低群による下位尺度得点

「ぼんだま」所属生徒の「ボランティア活動イメージ」の高低群による下位尺度得点の差を検査するために各因子別の高低群の下位尺度得点について t 検定を行った。その結果は、表4のとおりであった。「自己実現」は、「自己成長 ($t(33)=3.09, p<.01$)」、「精神的 high揚 ($t(33)=3.20, p<.01$)」、「ヘルス安寧 ($t(33)=2.37, p<.05$)」、「評価承認 ($t(33)=2.49, p<.05$)」で有意差がみられ、低群より高群が高かった。「親和支援」は、「評価承認 ($t(33)=2.08, p<.05$)」で有意差がみられ、低群より高群が高かった。「否定」は、「自己成長 ($t(33)=2.03, p<.10$)」で有意傾向がみられ、高群より低群が高かった。「福祉支援」には有意差はみられなかった。

表4 「ボランティア活動イメージ」の高低群における「ボランティア活動の成果志向」の

下位尺度得点の平均値と標準偏差, *t* 検定の結果

	自己実現				親和支援				否定				福祉支援			
	高群(n=17)	低群(n=18)	<i>t</i> 値		高群(n=20)	低群(n=15)	<i>t</i> 値		高群(n=20)	低群(n=15)	<i>t</i> 値		高群(n=17)	低群(n=18)	<i>t</i> 値	
自己成長	平均	4.25	3.63	3.09 **	4.03	3.78	1.11		3.74	4.18	2.03 *		3.97	3.88	0.38	
	SD	0.27	0.39		0.27	0.60			0.47	0.26			0.25	0.59		
精神的高揚	平均	4.22	3.64	3.20 **	4.06	3.73	1.62		3.81	4.07	1.27		3.85	3.98	0.63	
	SD	0.28	0.26		0.29	0.37			0.36	0.30			0.25	0.44		
キャリア開発	平均	3.79	3.42	1.55	3.68	3.50	0.69		3.45	3.80	1.42		3.60	3.60	0.02	
	SD	0.46	0.51		0.46	0.58			0.40	0.62			0.40	0.64		
ヘルス安寧	平均	3.55	2.91	2.37 *	3.35	3.04	1.10		3.26	3.17	0.29		3.22	3.22	0.00	
	SD	0.77	0.45		0.60	0.80			0.50	0.98			0.39	1.01		
評価承認	平均	3.65	2.97	2.49 *	3.55	2.97	2.08 *		3.13	3.53	1.41		3.23	3.36	0.42	
	SD	0.88	0.35		0.55	0.75			0.72	0.62			0.42	0.99		

***p*<.01, **p*<.05, +*p*<.10

4. 考察

4.1. 本校生徒1, 2年生が抱くボランティア活動イメージ

「ボランティア活動イメージ」質問紙調査から、「自己実現」、「親和支援」、「否定」、「福祉支援」の4因子が抽出された。しかし、荒井(2016)で抽出された「強制無責任」は見出されなかった。4因子には性別による差がみられた。「自己実現」、「親和支援」、「福祉支援」は男子より女子が高く、逆に「否定」は女子より男子が高いことが示された。荒井(2016)においても「自己実現」、「親和支援」は同様の結果が示されている。このことから女子は男子よりボランティア活動に対し前向きな捉え方をしていることが明らかになった。

ボランティア活動イメージについては、小・中学校時代に行ったボランティアの経験の有無に差がないことが示された。しかしながら、今回の調査においては、どのようなボランティア活動をどれくらいの頻度で行ったことがあるのか詳細に質問していない。そのため、1回のみ経験者、複数回の経験者が混在していると思われる。今後は、過去の経験の回数や活動の内容等について詳細に調査し検討する必要がある。

4.2. 「ぼんだま」所属生徒の特徴

「ぼんだま」所属生徒の特徴をみてる。学年による違いがみられたのは、ボランティア活動の成果志向の「精神的高揚」で、2年生が1年生より高い値であった。ボランティア活動で得られた充実感や達成感、楽しさなどのプラスの感情は、次の活動への原動力となり、活動を続けていくことにつながっているのではないかと推測される。また、上級生は昨年度の経験もあることから精神的なゆとりが生まれ、ボランティア活動を楽しむことができるようになった可能性も推察される。

「ぼんだま」所属の有無による違いがみられたのは、ボランティア活動イメージの「自己実現」であった。「ぼんだま」所属群の方が非所属群の生徒より高い結果が示された。活動に参加した「ぼんだま」所属生徒は、多くの知識や技術を活動の中で学び、多様な人々の心に共感し、意見の違いや立場を理解する柔軟性や発信力、粘り強く取り組む実行力などの能力が磨かれる。生徒の感想に見られるように準備や練習の不足に対するマイナスの感情が出てくる場合もある。しかしながら、活動をとおして多様な価値観や考えに出会えたり、あらたな自分を発見し成長を実感できたりする機会に恵まれやすい。よって、ボランティア活動を自分のために有益な活動であると強く認識する生徒が多いと推測される。大学生のボランティア活動へのイメージを検討した荒井(2016)の研究においても志望群の方が非志望群よりも自己実現を高く抱くことが明らかされている。

「ぼんだま」所属生徒の中でも「自己実現」を強くイメージしている生徒は、「自己成長」、「精神的高揚」、「ヘルス安寧」、「評価承認」の成果を強く期待することが示された。ボランティア活動を行うこと

は自己実現につながると強く考える生徒は、成果に対しても高い期待を持っていることが明らかになった。専門学校生を対象にした研究においては、ボランティア活動の経験を通じて援助成果が得られるほど、ボランティア活動継続が動機付けられることが明らかになっている（妹尾 2008）。

ボランティア活動への参加志向動機を高めるためには、自己実現イメージの醸成と否定イメージの低減や親和援助イメージの肯定的イメージへの形成を図ることが効果的であり、ボランティア活動に対するイメージへ訴求する工夫が必要であることが示唆されており（荒井 2016）、指導のあり方を考える際のヒントとなるだろう。

4.3. 今後の活動のあり方と課題

以上のことを踏まえ、今後のボランティア活動の指導に追加したいことは、以下の2点である。第一は、自分の活動についての役立ち度や満足度を実感でき、生徒同士が互いに活動を認め合う場を設定することである。ボランティア学習には、「Preparation（準備学習）」、「Action（活動体験）」、「Reflection（振り返り）」、「Celebration（認め合い）」、「Diffusion（発信・提言）」の5つの学習過程がある（長沼 2009）。現在、準備学習や活動体験が活動の中心になっている。より充実したボランティア活動を行うために振り返りや認め合い、発信・提言などの過程も含めた活動を取り入れることで、自己の成長にとって有意義な活動であったことを再認識する時間を作ることができる。第二は、振り返りのためのツールとして活動履歴を保存できるポートフォリオの作成を行うことである。活動を通して学んだことを振り返り、記録用紙に文章で記入する。これは、後日生徒自身が活動を振り返ったり、生徒同士で情報を共有したりする際に役に立つと考える。さらに、「自己実現」に関連する成果や課題が具体的な形として残る貴重な記録は、進路の面接や志望理由書等の作成においても有効な資料になるだろう。以上に示した新たな指導は、ボランティア活動への参加や成果を高める鍵となる「自己実現」イメージに働きかける（荒井 2016）方法として有効であると考えられる。

ボランティア活動を単なる体験活動で終わらせずに学習過程の中で地域の課題に関心を持たせたり、これからの自身の生き方を考えさせたりするきっかけを生徒に与えていきたい。ボランティア活動とおしてどのようなことを学び、今後どのような場面に活かしていきたいのかを生徒に具体的に考えさせることを大切にしていきたい。

本研究の課題は、以下の2点である。第一は「ぼんだま」所属生徒にのみ「ボランティア活動の成果志向」質問紙調査を行ったために調査人数が少なく、先行研究に示された因子構造を利用して分析を行った。調査対象者を増やしてボランティア活動の参加成果志向に関する因子構造を明らかにし、「ぼんだま」所属生徒の特徴を明らかにしていく必要がある。第二はボランティアイメージはボランティア活動の種類によって異なることが示されている（岡鼻 2013）ため、活動に対するイメージをつかむためには、経験したボランティア活動内容の影響を考慮した検討が必要である。

5. 結論

本研究では、ボランティア活動の指導のあり方を検討するために、本校生徒1，2年生に「ボランティア活動イメージ」質問紙調査、「ぼんだま」所属生徒に「ボランティア活動の成果志向」質問紙調査を行った。その結果、次のことが明らかになった。

- (1)「ボランティア活動イメージ」質問紙調査からは、「自己実現」、「親和支援」、「否定」、「福祉支援」の4因子が抽出された。
- (2)ボランティア活動に対するイメージには性別による差がみられ、女子は男子よりボランティア活動を前向きにとらえていることが示された。

(3) 「自己実現」を強くイメージする「ぼんだま」所属生徒は、「自己成長」、「精神的な高揚」、「ヘルス安寧」、「評価承認」の成果を高く得ていたことが示された。

以上のことから、ボランティア活動への参加や成果を高めるためにボランティア学習過程の中に振り返りや認め合い、発信・提言などの活動を設けたり、活動履歴を保存するポートフォリオを作成させたりする指導を今後検討していく。

6. 引用文献

荒井俊行 (2016) 大学生のボランティア活動へのイメージが参加志向動機・不参加志向動機に及ぼす影響. 日本教育工学会論文誌, 40(2) : 85-94

荒井俊行, 野嶋栄一郎 (2017) 大学生のボランティア活動への参加成果志向が参加志向動機・不参加志向動機に及ぼす影響. 日本教育工学会論文誌, 41(1) : 97-108

熊毛地域青少年育成推進協議会 (2017) 種子屋久通信. 熊毛地域青少年育成広報誌, 第 44 号

長沼豊 (2009) 学校ボランティアコーディネーション. 筒井書房

岡鼻千尋 (2013) ボランティア活動経験が大学生のボランティアイメージに及ぼす影響, 心理学, 34(2) : 68-76

妹尾香織 (2008) 若者におけるボランティア活動とその経験効果. 花園大学福祉科学部研究紀要, 16 : 35-42